

洋楽受容と士族たち

—津軽地方を中心に—

北原 かな子*

はじめに

近世に津軽地方の中心だった弘前藩では、幕末から洋学導入に力を入れ、明治初期には藩校を継承した東奥義塾に外国人教師が招聘された。この外国人教師たちが宣教師であったことから、同地方には洋楽をはじめとしたキリスト教文化が広がった。その一方で邦楽を守る動きもでた。本報告は、政治社会体制の変化の中で行われた地方の文化形成をめぐる諸相の一つとして、戊辰戦争から明治期にかけて弘前藩士族の音楽に関するさまざまな活動を見ていくものである。

1. 東奥義塾とキリスト教

戊辰戦争後の弘前藩

弘前藩は「北狄の抑え」として、幕藩体制においては北方警備上の重要な役割を担う存在だった。戊辰戦争の際、当初は東北諸藩と共に「奥羽越列藩同盟」に加わるが、途中からは行動を別にして新政府軍側につき、官軍として終戦を迎えた。しかし戦争終結後の同藩は、軍事拠点としてのレゾナントルが低下し、中央との格差を意識する辺境意識が強く残ることとなった。この「辺境」意識をどう打開し、どのように地域を発展させて行くかが、この地方の課題となった。

本多庸一 の存在

こうした弘前藩士族の若き指導者として本多庸一（1848-1912）がいた。本多は、弘前藩上級武士の家系に生まれ、幼い頃から優秀さで知られると共に、人格的にも敬慕されていた人物である。戊辰戦争が終わった後に洋学習得目的で横浜に行き、そこで改革派宣教師バラ（James H. Ballagh 1832-1920）から洗礼を受けた初の日本人たちの一人であった。本多は、中央から取り残されていく故郷の状況を憂えており、その不振打開のためには教育が最も重要であると考えていた。こうした考えを持つ若き指導者たちによって設立されたのが、東奥義塾だった。



東奥義塾の開学

東奥義塾は明治5（1872）年に旧弘前藩主の個人的援助によって弘前に開学した私立学校である。旧弘前藩校稽古館の後身であり、開学当初から外国人教師を招聘して洋学教育に力を入れた。学校の基本構想は本多庸一の盟友で慶應義塾出身の菊池九郎によって作られており、菊池自身は中等以上の教育機関は私立学校であるべきという考え方を持っていたことから、あくまで県や国の財政援助を受けない方針をとった。

同校は洋学中心の教育を行い、1873年の開学時から1880年まで5人の外国人教師が着任した。彼らは歴史や数学などの諸学科を英語で指導したことから、1877年には生徒が直接アメリカの大

* 青森中央学院大学教授

学に進学できるほど東奥義塾の英学水準は向上した。

東奥義塾とキリスト教

この時東奥義塾に招聘されて来た外国人教師は、みなプロテスタントの宣教師、あるいはその関係者であり、弘前には東奥義塾を通してキリスト教が広がった。特に1874年末、本多庸一とともに弘前で宣教開始したメソジスト派宣教師ジョン・イング（1840-1920）の活動は、弘前藩領内で尊敬を集める本多の影響力もあり、一気に布教効果があがっていった。イングは弘前に到着して半年後の明治8（1875）年6月6日に、東奥義塾生を中心とした14人に最初の洗礼を授けている。そして10月3日には公会形式でキリスト教会が設立された。これはのちにメソジスト派所属教会となり、伝道に従事する人々が多く出たことから、メソジスト派内では「日本メソジストの母」と評されるようになる（MEC, 1894: *Annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the year 1893*, p.209）。

ただし初期にキリスト教を受け入れた士族たちは、純粋な宗教というよりは、キリスト教受容により他国の文化を受け入れる、あるいは劣位からの脱出という感覚の方が強かったと思われる。それは最初に洗礼を受けたメンバーが次のように語ったことから判断できる。

私等は何て耶蘇信者となつたかと言へは欧州文明国ては耶蘇教を奉せぬ国民には対等の権利を与へない。日本が文明国の仲間入りするには耶蘇になるのが一番捷徑〔ちかみち〕だと云ふ考へを有つたからである。是は独り私計りてはない、(略)（『弘前新聞』明治42年10月8日付）

2. 元武士たちと賛美歌—洋学から洋楽へ

最初の洗礼と賛美歌

士族にキリスト教が広がったということは、彼らが賛美歌を歌い始めたということでもあった。特にイング夫人はオルガン持参で弘前にきており、賛美歌の練習にはオルガンの音を用いたものと思われる。



イング夫妻が日本から故郷に送った書簡には、日本での生活の様子がつづられているが、そこから人々が音楽に親しんで行った様子を垣間見ることができる。

彼らは安息日や、または歌うためにくる金曜の夕方に、私たちが何も言わなくても新しい曲を歌おうと提案してきます。

（‘From Tsunara’, June 28, 1875. *Heathen Woman’s Friend*, 1875年10月号）

若者たちが積極的に歌い始めているように見受けられる。初めての洗礼式の時も、洗礼を受けた人々は感動に包まれ、そして「Jesus, Lover of My Soul」を歌った。

こうして歌い始めた弘前の若者たちは、やがて東奥義塾や教会の中だけではなく、公の場でその歌を披露する機会を持つことになった。明治9（1876）年7月15日、明治天皇奥羽巡幸の際に青森小学校において行われた天覧授業である。この時、イングは指導していた東奥義塾生10名に英文のスピーチをさせ、最後に全員で頌歌を歌った。曲名は賛美歌“CORONATION”（戴冠式）で、英語の歌詞を天皇賛歌に書き換えたものだった。ほぼ成人年齢に達していた10名の東奥義塾生および引率教師による頌歌は出席者を驚かせ、その心に強い印象を残した。そしてその様子は東京日日新聞や朝野新聞により、全国に報じられた。

ハリストス正教と聖歌

ここで仙台藩や盛岡藩のことも少し述べる。弘前の東奥義塾を中心としてプロテスタントメソジスト派の宣教が進むのと同じ頃、ハリストス正教を受け入れた盛岡藩や仙台藩の士族は、やはり聖歌を歌う問題に直面した。ニコライの日記に次のように書かれている。(『宣教師ニコライの全日記』第2巻(教文館2009)より)

・1881年5月16日 宇都宮

佐野を通して植野村に至る。変哲のない小さな教会。聖歌隊は全部少女で八人。ロマンと歌い始めたのはいいが、いっこうに声が揃わず、思わず逃げ出したくなるほどだった。そこで、ロマン(引用者:ロマン千葉)に斉唱のままにするように言ったところ、きちんと良く揃った声で歌えるようになり、聖体礼儀代式(オベードニツァ)を最後まで歌い終えることができた。

・1881年5月23日(6月4日) 涌谷

前略)会堂として古い家を借りている。聖体礼儀代式するとき、聖歌隊の声があまりに不ぞろいなので、ロマン[千葉]に、かれ一人で歌うように言わねばならなかった。あきらかに、声を合わせるといことがわかっていないか、あるいは楽譜のなんたるかがわかっていないのだ。手に楽譜を持っているのに。ともあれ、こんなへたな聖歌隊に出会うのはこの教会が初めてだ。佐沼から盲人のアレクサンドル[熊谷]をよこすように約束した。聖歌隊の訓練をしてくれるだろう。

ニコライが苦勞していた様子がわかる。カトリックも含めキリスト教の祈りの場に音楽はつきものだが、ハリストス正教音楽を研究した松島純子によると、特にハリストス正教の聖歌は集まって祈るためのものであり、神から信徒へのメッセージ、信徒から神への感謝を運ぶものとして音楽が位置づけられているという。またハリストス

正教は奉神礼の際に楽器を使用せずアカペラで歌うことから、もともと西洋音楽の音階に慣れていない当時の日本人にとっては、決して易しいものではなかった。

盛岡藩出身でハリストス正教に入信し、のちに長司祭を務めた三井道郎は、初めて聖歌の練習をした時、指導に当たったヤコフ・チハイからドレミファの音を出すようにと言われても音がわからず、必要な音を出すこともできず、しばらくはただ聴いて耳を慣らすようにと言われたことを回顧している(三井道郎「回顧断片」『正教時報』842号、p.8)。西洋音楽は基本的にドレミファソラシの七音で構成されているが、五音による旋法からできている邦楽と音の組織が異なるために、当時の日本人の、特に成人男性にとっては聴き取ることも歌うことも簡単なことではなかったのである。

こうした状況の中で音楽についての論説も現れた。仙台藩士小野莊五郎は、明治10年に『講習余誌』を刊行し、中に「音曲ノ不正ハ人民ノ品行ヲ乱ル」を執筆した。

「我輩ノ渴望シテ興サント欲スル者ハ「ヨルガン」ノ樂是ナリ、夫レ「ヨルガン」ハ其音自在ニシテ歡喜悲哀剛柔愛慕意ニ随テ其音ヲ発ス、又其謡フ所ノ声ハ之ヲセツニ別テ老若男女皆能ハサルナシ、且其謡フ所ハ専ラ古聖賢ノ歌詠ニシテ一モ正必修徳ノ意ニアラサル者ナシ、是欧米諸邦ニ行ハルハ所ノ音曲ナリ」(北原かな子・山下須美礼「旧仙台藩士小野莊五郎の音楽論—音曲ノ不正ハ人民ノ品行ヲ乱ル—」『國史研究』143、2017、pp.33-45)

小野は礼楽思想との関連を交えつつ、西洋音階による歌を歌う必要性を説いている。キリスト教を受け入れた元の武士が音楽に苦勞したことをいまに伝える内容である。

3. 弘前藩士族と邦楽復興活動

ここまで文明開化と共にキリスト教を受け入れ

た元武士たちから、洋楽が少しずつ広がってきた様子を述べてきた。その一方で邦楽を守ろうとする動きをする人たちの活動にも目を向けておきたい。弘前藩士だった楠美家の人々である。

楠美家は弘前藩の中でも要職にあった家系だが、さらに代々音楽（平曲の技法）を伝え、「音楽の家系」という意識が強い家柄でもあった。その中から次に述べるような、邦楽保存活動に奔走する人々が出ている。

佐野楽翁と弘前音楽会



1900（明治33）年、藩政期の音楽保存を目的として弘前音楽会が作られ、会長を平曲家楠美太素次男の佐野楽翁がつとめた。長勝寺で開かれた演奏会では五種の音楽（雅楽 平曲 謡曲 箏曲 明暗曲）が演奏され、非常に盛会だった。その時の様子は次の様に報じられた。

各種の演曲者過半は頭霜眉雪の老人にして皆極秘を究め靈妙幽玄の伎を揮はれしかは何れも賞嘆の外なかりし中にも雅楽、謡曲の如きは世人の聞を得さりし所なるを以て今日之を聞き遠く三十年前藩政当年の盛時を憶ひ起こせしにや暗然として坐ろに懐旧の涙に禁へざる故老も見受けられたり（『東奥日報』明治33年9月15日付『青森県史資料編近現代2』所収）

館山漸之進と邦楽調査掛



さらに佐野の弟である館山漸之進の活動は、地元弘前の中に止まらなかった。彼は平曲伝承の行く末を憂い、政府への度重なる交渉の結果、当時洋楽中心だった東京音楽学校に邦楽調査掛設置を実現させ、平曲を含めた邦楽保存の活動に奔走した。この館山の活動は、西洋音楽に対す

る意識喚起につながり、洋楽」に対比される「邦楽」の概念が生まれたと指摘されている。（寺内直子『雅楽の〈近代〉と〈現代〉—継承・普及・創造の軌跡』岩波書店、2010）

楠美恩三郎（1868-1927）とオルガン



楠美恩三郎は、平曲家楠美晚翠の三男で、佐野や館山の甥にあたる。東奥義塾、東京音楽学校師範部を卒業後、香川や京都での師範学校勤務を経て、明治35（1902）年に東京音楽学校助教授となり、同42（1909）年にオルガンの教授に就任した。彼は日本人の心のふるさととも称される名曲が入った尋常小学唱歌の編纂に携わる一方、叔父の館山漸之進を助けて邦楽調査保存活動も行った。

むすびにかえて

明治期は伝来の邦楽と渡来の洋楽とが出会い、拮抗した時期である。地方都市弘前のケースは、身分制が消えた後の士族たちの、音楽に関わる活動が弘前という一つの地域にとどまらず、日本の文化形成に影響したことを示す。

弘前に洋楽を導入するきっかけになったのは士族が学んだ洋学という新しい「知」だった。洋学から洋楽へと新しい音楽が波及効果的に広がる一方で、邦楽を守ろうとしたのも士族たちだった。

こうした士族の活動は、社会体制の激変の中にあって、その文化的変容に元武士たちがどう対応しようとしたのか、ということでもあろう。その背景には地域の指導者たらんとした彼らのアイデンティティの問題があったと考えることができるのではないだろうか。

主要参考文献（上出の他）

・北原かな子『洋学受容と地方の近代—津軽東奥義

- 塾を中心に』岩田書院、2002.
- ・北原かな子「明治初期津軽地方のキリスト教受容」
北原かな子・郭南燕編『津軽の歴史と文化を知る』
(岩田書院、2004) pp.27-43.
 - ・北原かな子「『邦楽』と『洋楽』—二つの音楽世界
に生きた人々」別冊環『江戸—明治 連続する歴史』
(藤原書店、2017) pp.80-91.
 - ・城元智子・北原かな子「金須嘉之進と『帝室附カ
ペーラ声楽院』—東北地方におけるキリスト教受
容に関連して—」『青森中央学院大学研究紀要』28号、
2017、pp.31-44.
 - ・鈴木啓孝「伝統芸能者の『遺言』にみる国民文化
—平曲家・館山漸之進の『情願書』を素材に」『文
芸研究』183号、2017、pp.49-62.
 - ・松島純子「ニコライ大主教と日本の聖歌」
<http://www.orthodox-jp.com/maria/hismeiji.htm>